



Data

監督・製作：マイク・マッコイ
 監督・製作・編集：スコット・ワウ
 企画協力：トム・克蘭シー
 脚本：カート・ジョンスタッド
 出演：ローク/マイキー/デイヴ/
 エイジェイ/サニー/レイ
 /ワイミー/ミラー (以上、
 NAVY SEALs 現役
 隊員) /ロゼリン・サンチェ
 ス

👁️👁️ みどころ

ネイビーシールズの隊員たちが実弾をぶっ放しながら、過酷な任務を遂行！使用される銃や車両、ヘリはもちろん、潜水艦や空母までホンモノ！そんな本作の「売り」は、リアルな脚本によってさらに加速した！

さあ、あなたも「最前線を追体験」しよう。わからなくなるのは、どこまでがホンモノ？どこからがフィクション？ということだが、それもこれも、まさに百聞は一見に如かず・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本作の売りは、「最前線を追体験」！■□■

NAVY SEALs (ネイビーシールズ) とはアメリカ海軍の特殊部隊のこと。2001年の9・11世界同時多発テロ以降アメリカの憎き敵となっていたオサマ・ビンラディンを追い詰め、2011年5月2日に彼を射殺したことによってネイビーシールズはその実力の程を全世界に示したが、さてその実態は？戦争映画では軍艦や戦闘機、戦車をはじめ大砲や銃など、大量の武器、そして大量の火薬や爆弾が使用されるが、それらはすべてカメラを意識したものだから、いくら激しい戦闘で肉片が吹っ飛んでも、それは所詮つくりもの。そうだからこそ逆に安心感を持って観客はスクリーンを観ることができるのだが、もし映画で実弾が使用されるとすれば・・・？

本作で使用された武器や車両、ヘリコプター、潜水艦、空母はすべてホンモノ。そして撮影には実弾が使用されたい。しかも本作にはリーダーのローク大尉や、副官のデイヴをはじめ、現役のネイビーシールズ隊員がたくさん出演 (主演) している。それが本作の売りだ。もっとも、ドキュメンタリーではなくフィクション映画として成立させるためにはストーリーが必要なところ、本作は「なるほど、こりゃ面白い！」と思わせる脚本に

もついで製作されている。単なる協力や協賛ではなく、ここまでネイビーシールズが映画づくりに深く関与したのは前代未聞では・・・？

■□■まずはモラレス救出作戦の「お手並み」から■□■

2001年の9・11テロ以降一貫してアメリカの「憎き敵」となっていたのは、オサマ・ビンラディンだが、本作でのそれは東南アジアのテロリストであるアブ・シャバール。ところが悪い奴はテロリストだけではない。テロリストとの麻薬取引や武器密輸取引によって莫大な富を手に入れているアメリカ人の売国奴がいるというから困ったものだ。それが今、CIAが血眼になって追っている男クリスト。本作でネイビーシールズが挨拶代わりに見せてくれる作戦は、この男からのモラレス救出作戦だ。

モラレス（ロゼリン・サンチェス）はメキシコの医師を装ってコスタリカに潜入し、アブ・シャバールとクリストとのつながりを探っていたCIAの女性エージェントだが、CIAの動きに気づいたクリストによって拉致され現在拷問を受けているらしい。さあ、ロック大尉率いる「チーム7」の面々は、川に囲まれたクリストのアジトの中に監禁されているモラレスをいかに救出？映画ではこんなシークエンスに見馴れているが、ここで発砲される銃が実弾だと言われると、否が応にも緊張感が……。また、モラレスを救出した後の銃弾戦を含む激しいカーチェイスも、トム・クルーズが見せるド派手なアクションとは全く異質だから、思わず両手に力が。しかし、この作戦が無事終了すると、思わずホッ……。



©2012 IATM, LLC

■□■アブ・シャバールが構想する恐るべき自爆テロとは？■□■

第2次世界大戦までの「戦争」のイメージは、あくまで正規軍同士の激突。しかし、少なくとも現在はそんな戦争より、「テロリストとの戦い」が主要なテーマになっている。将来太平洋を挟んでアメリカと中国が激突すれば、正規軍同士の戦闘も想定しなければならないため、両国ともその準備に怠りはないが、少なくとも今は本作が想定しているようなテロリストとの戦いが主要テーマだ。イスラム原理主義者（イスラム聖戦派？）の自爆テロをどう評価するかは、太平洋戦争において若者を神風特別攻撃隊に駆り立てたニッポン

国としては難しいところだが、少なくともそりややめてもらいたいもの。

本作でアブ・シャバルが発明した自爆ベストはジェル型爆弾の球500個を付けた驚異の破壊力を持つうえ、セラミック製のため金属探知機に引っかかることなく、国境を難なく越えるらしい。そして今、それを身につけたイスラム聖戦派のテロリスト16名がラスベガス、サンディエゴ、サンフランシスコ等の主要都市に向けて移動しているらしい。クリストのアジトから押収したケータイからそんな史上最悪のテロ計画が判明した今、ネイビーシールズにいかなる命令が・・・。

■□■この「自白」をどう評価？■□■

そんなアブ・シャバルによる大規模なテロ作戦が判明したのは、ネイビーシールズが南太平洋のクルーザーで女たちと楽しんでいるクリストを急襲し、その身柄を確保して「自白」を得ることができたからだ。本作では冒頭のモラレス救出で見せる落下作戦に続いて、アフリカ大陸沖での潜水艦との合流作戦やクルーザー拿捕作戦などの見事な姿を見ることができる。これこそが膨大な軍事予算を使って日々の訓練を積んでいるネイビーシールズの実力だが、これが実現できたのはクリストの「自白」のおかげだ。

ところで、「大阪地検特捜部主任検事証拠改ざん事件」以降、日本では「取り調べの可視化」の必要性が強調されているが、本作に見るミラーによるクリストの尋問をどう評価？ たしかにここでミラーはあくまで冷静にクリストに対して語りかけ、机を叩いたりはしていない。しかし、クリストの家族とりわけ幼い娘の姿をケータイの画面で見せながら尋問することによって、巧みにクリストの「自白」を引き出しているのだから、実質的にこの自白は強要によるもの？ 他方、これが「尋問のプロ」のテクニック？ といえればたしかにそうだから、その評価は難しい。本作後半に見るネイビーシールズ隊員たちの英雄的行為は華々しいが、それはすべてクリストからスピーディーに自白を勝ち取ることができたためだということを、しっかり理解しておく必要がある。

■□■どこまでがホンモノ？どこからがフィクション？■□■

前述のとおり、本作の売りは現役のネイビーシールズ隊員が「俳優」として出演し実弾を使って「演技」していることだが、バタバタと人が死んでいくのはこの実弾のせい？ まさか・・・。本作のハイライトは、今まさに自爆ベストを来てメキシコ国境からアメリカ国内へ入ろうとするテロリストたちとそれを率いるアブ・シャバルのアジトへの、ネイビーシールズ隊員たちの決死の急襲だ。

メキシコのメヒカリという地域は治安が最悪で、現地軍ですら恐れる危険地帯らしい。ネイビーシールズの精鋭たちが現地軍の協力を得てその地域に入り、アブ・シャバルのアジトを急襲するわけだが、トラックに分乗して門を突破した後の彼らを待っていたものは？ 47人の赤穂浪士ですら討ち入り前は入念に吉良邸の地図（図面）をチェックして突入したが、それでも吉良上野介を捜し出すのはかなり手間をとったはず。ところがローク率いるネイビーシールズ隊員に課せられた任務は、そんな情報が全くないまま自爆ベストを発見してこれを廃棄するとともに、アブ・シャバルを見つけて逮捕もしくは射殺する

こと。そんな過酷な任務を実弾で実行すれば、多数の死傷者が出るのでは？案の定、手に汗握る銃撃戦の末、結果的に自爆ベストを発見、押収しアブ・シャバールも射殺することができたが、ローク大尉をはじめとする隊員たちの損失は・・・？そこで、どうしても考えてしまうのが、どこまでがホンモノ？どこからがフィクション？ということ。それも含めて、本作のハイライトはじっくりあなた自身の目で。

さらにもう一步突っ込んで考えたいのは、ひょっとしてこんなネイビーシールズ隊員たちの必死の行動のおかげで、世界のそして日本の安全が保たれているのでは？ということだが・・・。

2012（平成24）年5月22日記

中国初の空母は脅威か？

1) 2012年9月11日の野田政権による尖閣諸島国有化宣言以降、日中関係が険悪化する中、週刊誌上では「日中もし戦わば？」等の物騒な見出しもチラホラと。1930年代の「日米もし戦わば？」ほどの切迫感はないが、中国海軍が10月1日の国慶節と11月の共産党大会の前祝い(?)のように就役させた空母の配備に要注目！

2) 1941年12月8日にハワイの真珠湾攻撃に向かった日本の精鋭空母、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴に積まれた艦載機の攻撃によって米太平洋艦隊の戦艦群は大打撃を受けたが、空母をたたけなかったのが聯合艦隊司令官山本五十六最大の誤算だった。第2次世界大戦後に生まれた米ソ冷戦に勝利したアメリカは「唯一の大国」となったが、それを支えたのが「七つの海」を支配する米海軍の空母艦隊だ。

3) 満載排水量5万8500トンの「遼寧」は、旧ソ連が1980年代に建造した旧式空母をウクライナを経て中国が譲り受け3年間かけて大改修したもの

だが、さてその作戦遂行能力と戦闘能力は？2012年10月28日付日経新聞の「中国初の空母は脅威か」は、そんな問題意識で陸・海・空それぞれの日中戦力比較を数字で示したうえ、「遼寧」の脅威について次のとおり解説している。

4) すなわち、空母最大の脅威は艦載機の攻撃力だが、現在の中国海軍では戦闘機「J15」は開発途上でヘリコプターしか実戦投入できないから、脅威は弱い。しかも、護衛艦や潜水艦、早期警戒機などを含む空母を中心とした艦隊作戦の遂行には長年の訓練が必要なところ、他の艦船と情報のやりとりをするデータリンク・システムの整備が遅れている。逆に日本の平成22年版の「防衛計画の大綱」では潜水艦を増強しているから、その魚雷や巡航ミサイルで「遼寧」を撃沈ないし航行不能にすることも可能。しかし、今後中国海軍の増強が続くとすれば、日本は耐えられないのでは？概ねそんな分析だが、さて現実は？

2012（平成24）年10月31日記